
約束

七瀬 夏葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N6159P

【作者名】

七瀬 夏葵

【あらすじ】

雪の降る寒い夜。守れなかった約束の果てに一人過ごす主人公の前に現れたのは……。

守れない約束ばかり、重ねてしまふのは何故だろう。

「悪かったな。今度ちゃんと、あれよりいいやつ買ってやるから」「ホントに？」

言いながら向けられた疑いの目を、今でもはつきり覚えてる。

あの時の約束は、たしかにほんの気休めだった。

壊してしまったガラスの灰皿の代わりを買ってやるなんて。

些細な、その気になればいつでも叶うだろう約束。

だけどアイツは多分、それが叶う事が無いと知ってたのかもしれない。

降り積もる雪が、いつか溶けて無くなるのと同じように。

熱情も愛欲も、いつかは夢みたく醒めてしまふんだと。

……読み切り小説【約束】……

サクサクと、歩く度に音がする。

白い世界に足跡が残って行く。

吐く息が白く霞んだ。

辿り着いたアパートの階段をカンカンと音をたてて昇る。

痛いくらい冷たくなった鍵束を取り出して、鍵穴へ差し込み回す。

ガチャリと何の抵抗も無く鍵は開き、扉を開けて中へ足を踏み入れた。

冷え切った部屋の冷気は、外より幾分ましといった程度だった。

扉の鍵をカチャリと回し、冷たい床に腰を降ろして革靴を脱ぎ捨て

る。

代わりに履き替えたスリッパが、歩く度パタパタ音をたてる。少し前に買い替えた冬用のコレは、温かいけど音がうるさくてかわない。

もっとも、気にするべき相手はこの部屋にはいないんだが。

「ふう……………」

もうストーブを点ける気にさえなれず、ただゴロリとベッドに横になった。

上着を脱ぐのさえ面倒だ。

ぼんやりと窓を見る。

ぼっかり浮かんだ大きな月が、寒々しくも綺麗に映った。

最低限の物しか無い殺風景な部屋は、その白々とした灯りに照らされ、何とも言えない寂寥感を漂わせている。

小さなテーブルの上に置かれた青いガラスの灰皿が、月明かりを受けて一際キラリと冷たい光を放つ。

買ったその日に使うべき主がいなくなったアレは、結局一度も使われる事なく、美しくそこに鎮座したままだ。

「煙草、買いに行くか」

唐突に思い付いた。

使う事なく光り輝くばかりのソレは、何処か哀れにさえ見えて、いっそも思い切り汚してやりたかった。

この時間では自販機は無理でも、コンビニに行けば買えるだろう。身体を起こしたその時だった。

ガチャガチャ

鍵が開く音が響き、扉が開いた。

「起こした？ごめん」

驚きに目を見張る。

冷たい月に照らされたその人を、穴が開くほど見つめる。
間違い、無い。どうして

「ソレ、取りに来た。それだけ」

短く言い、黒い靴下を履いたその人は中へと入り、青いガラスの灰皿へと手を伸ばした。

「じゃあね」

そのままソレを持って踵を返す。

「待て!!」

その背が、ピクリと震えて足を止めた。

「何？」

振り返ったその顔は、息を飲むほど綺麗だった。

冷たい月の光を受けて立つその姿は、まるで何かの神話みたいで . . .

「用、無いなら行くよ」

「!!--」

踵を返したその背を追い、手を掴んだ。

「　　っ！！」

身体ごと引き寄せて、組み敷いた。

「何のつもり？」

綺麗な眉がしかめられ、冷たい抗議の音が響いた。

「約束したろ。次に戻ったら、離さないって」

熱を帯びた問いかけに、相変わらず冷たい声が返って来た。

「こつという時だけ？約束なんか、守った事無いくせに」

「それでもだ。今だけでいい。約束、果たさせる」

黙って唇を塞いだ。

重ねた手に指が絡む。それだけでもう、後は何も要らなかった。もどかしい思いで引き剥がしたコートのボタンが飛んだ。

そのまま下の衣服に手をかけ、その素肌を手を滑らせる。

滑らかな白い肌の感触が、指に、全身に、震えるような感覚を与えて行く。

息も出来ないくらい激しく口付けながら、もどかしい思いで自分の上着を脱ぎ捨てた。

下に着ていたジャケットもシャツも、何もかも全部放って、肌と肌を重ねる。

熱が、伝わる。唇から、肌から、お互いに、お互いの熱を、伝えて、

伝わって。

「好きだ……」

呟いたそれは熱を持ち、冷たい部屋に響いた。

「……知ってる」

「知ってて何で!？」

冷たい声は答えた。

「怖かった。どんなに好きでも、いつか離れる時が来る。そう思うと、たまらなかった」

あなたは嘘つきだから。

呟かれたソレは、冷たい部屋の中、シンと響いた。

「……嘘じゃ、ねえよ」

堪らず叫んだ。

「他にどんな嘘吐いたって、お前を好きって気持ちだけは、嘘なんかじゃねえ!こんな、自分でもどうにも出来ない想いが、嘘なわけあるかよ!……!」

何事か言おうと動いた唇を乱暴に塞いだ。

身体中に伝わり始めた熱が、もう何もかもどうでも良いと思わせた。頭はもう真っ白で、目の前の快樂以外、何も無かった。

冷たい床はもうすっかり熱を帯び、月明かりだけの薄暗い部屋の中、

二人の熱が果てた。

そうして荒くなった白い息を吐きながら、互いに手足を床に投げ出し、そのままぼんやり窓の外を見ていた。

「……………ねえ」

ふいに冷たい声が響いた。

「……………約束はしないでいい。ただそばに、いさせて」

答えの代わりに唇を重ねた。

その目がゆっくり閉じ、背に腕が回った。

冷たい月はその姿を隠し、外はまた、雪の華が降り始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6159p/>

約束

2010年12月23日20時52分発行